
Dragon Hunter ~飛翔編~

霧峰海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon Hunter（飛翔編）

【Nコード】

N6530C

【作者名】

霧峰海斗

【あらすじ】

ごく普通の高校生：高遠竜は、変人科学者の叔父の実験によって、異世界：ドラゴン王国ガルガスへと飛ばされてしまう。なんとかして元の世界へと戻ろうとするが、彼の苦勞は絶えず、ひょんなことからドラゴンハンターの職業につくはめに……。

第一章＊平穏な人生…のはずが＊

人生平穏が一番。それが俺のモットーだ。

でも…世の中、個人のささやかな願いが叶うほど甘くは無いだよな…。

「うわわわ！！そっち危険ですよ！！」

「どっちでも同じだろうーが！！」

「は、早く逃げましょう！！」

「馬鹿、そっちはだめだ！！」

「さっすがリュウちゃん、勘きくね」

「ほんと、助かりますよ」

「だったらこの状況なんとかしやがれ！！」

「うゝん…それはリュウさんでなくても難しいですよ」

「おまえら……」

「何で俺に頼る！！俺の平穩を

かえせ——っ！！」

H u n t e r 飛翔編

Dragon

俺の名前は高遠^{たかとお} 竜……名前の由来は聞くな。親父がドラゴン大
好き人間だからなんて、口が裂けてもいいたくねえ。空想の固まり
のような男が俺の親父だなんて……。だからといって同じ目で見ると
よ？俺は現在ごくごく、ごくごく…（以下エンドレス）普通の高校
3年生だ。まあ、周りの連中に言わせれば、普通じゃない部分があ
るらしいが。

だって、自分で普通じゃない部分がどこだっていわれても検討なん
かつくか？普通。

なんならいつでももいいぜ？俺のプロフィール。

身長は170以上。体重は50Kg以上。髪はまじめに黒（染め
るのに金なんか使ってられっか）顔は、はつきりいうとブスでもな
ければ美形でもない（はつきり言おう。美形って聞くと鳥肌立つん

だよ！！）まあ、そこそこ…ではある。

親友は2人。友人は少数。あんまし大勢とざわざわしていると、自分自身わけわかんなくなるんだよ。親友は深く狭く。友人は近所付き合い程度に広く浅く付き合うのが一番さ。

勉強はできるできない以前に大嫌いだ。面倒臭いし、かつたるいし。でも生きていくにはやんなきゃならねえから、しかたがなくやつている……ああそうさ、やつているんだよ。

それに、そんなにがつついてやんなくても成績は取れるだろ？これが俺の意見だが……。

どうもこの部分が他人から見ればおかしいらしい。

俺は授業をざっと聞いて、あとはさっと教科書読んでおけば半分は取れる。それにあれだ。

なんとなくわかるだろ？ある程度聞いておけば検討もつくさ。

「…つかねえよ（涙）」

「そうか？」

俺のつぶやきに、大崎^{おおさき} 孝太^{こうた}は先ほど返却された期末テストの結果を見ながらばやいた。

「見当なんか、ぜんっぜんつかねえ。それ、お前だけ！！ああ～またお袋に殺される～」

「やればできるって」

「できねえよ！！だろ？綾瀬？」

「…孝太はそれ以前の問題」

「ひ、ひでえ…涙」

孝太は竜の隣に座っている女子：綾瀬^{あやせ} 空に一刀両断されていた。

これがさつきいつていた俺の親友と呼べる奴ら2人だ。まあ、大
体わかるとおもっけど、俺は根っから人見知りで、人とかかわるの
は好きじゃない。でもこいつらは別。2人とはなぜか波長が合う。

おまけにこいつら、俺のことを変人よばわりするくせに、自分た
ちも変だということを認めようとしない。そもそも2人と知り合っ
た経緯からして普通じゃなかったからな。

孝太と始めて出会ったのは春。こいつは入学早々、遅刻・場所間
違え・忘れ物といった輝かしい入学を果たしたために、担任は、偶
然その場に居合わせ迷子になっているこいつをしょっぱいてきた俺
を監視役に任命したのだ（哀れ、その場にいた俺）だがはじめは面
倒だった俺も、何かと面白いこいつに結局引き込まれてしまい、拳
句親友と呼ぶまでになってしまった。

綾瀬との出会いはもっと変だった。いや、こいつの場合変といっ
てしまっただけは気の毒だ。だがそういうしかない。品行方正、成績優^{というより}
秀^{ツブ}といった、俺から見れば異次元に住んでいる綾瀬との接点が見つ
かる確率は無いに等しい。なのに、今の関係を築くことができたの
は、まったく偶然の出来事が引き起こしたのだった。

入学してから初めて日直をやることとなり、その相手が綾瀬。それ
で日誌に綾瀬の名前を書くときに下の名前を尋ねたら、さも嫌そう

に自分の名前をつけたのだ。気になって理由を尋ねたところ……。

『だって嫌でしょう？自分の父親が空を飛ぶのが夢だったから「空」だなんて…』

つまり2人とも、馬鹿な親父を持った子どもなのだ（しかも綾瀬の親父はピーターパンのように空を飛びたかったらしい……馬鹿親父とはどこにでも生息するんだな）

その日から俺と綾瀬は親近感を持つようになり、そこに孝太が加わり、現在に至るのである。

「まあ、今回再試がなかっただけいいじゃない」

「そう…そうだよな！！進歩だよな！！」

「進歩かどうかはわからない」

「あ、綾瀬…っ」

現在は夏真つ盛りの7月。1学期終了1日前で、成績等がすべて返却されたところだった。だからさつきから俺たちは騒いでいたのだ（実際騒いでいるのは孝太だけだが）なぜならば、推薦狙いの俺たちは、この成績が大学進学にかかわってくるからである。

「でも、この成績なら調理学校には十分足りるわ」

「そりゃそうさ！！だってそれに必要な科目、俺大好きだし」

実はこの問題児、何だかんだいってやりたいことはある。調理学

校に進学して、弁当屋を開きたいのだ。最初それを聞いた教師達もつといいところへの進学を進めようとしたのだが、本人の学力と経歴を見て、そのほうが無謀だということをいち早く気づき、専門学校への道へ進むこいつを認めたのである。

（…だったら最初からそうしてやれと俺はおもっただが。大人の当て付けな考えだけで進路を決めるな）

「しかし綾瀬は相変わらずすげえ。トップだぜ、トップ。本当に、お前の頭って不思議」

「あのね、これで当たり前。あそこの理工学部に進学するならこれくらいはしなきゃ」

学年トップの綾瀬の進学先は某大学の理工学部。正直言うと、綾瀬の当たり前は長い付き合いの俺たちにとって今でも超人の領域に値するものだ。だってそうだろ？入学してからずっとトップに君臨し続ける生徒だなんて。普通じゃねえ。

「まあ、あたしはいいとして…竜はどうするの？どこに行くの？」
「ん……」

俺のあいまいな答えに顔をしかめる綾瀬。

「竜のこの成績なら、それなりの大学にいけるけど…まずはやりたいうこと決めなきゃだめでしょう？」

「やりたいことっていつでも、なあ」

俺はガシガシと頭をかいた。

「そもそも俺が文系を選んだ理由事態、不順な動機だし。不順な動

機で選んだ文系でやりたいことっていわれても……」

俺が文系を選んだ不順な動機。それは文系のほうが『楽』だからである。それを良く知っている2人は、お互いの顔を見合わせてから俺のほうを見た

「それでも。普通にサラリーマンになりたいなら、それなりの大学にいかないかね。面倒臭がりの竜なんかどこにもやとってもらえないわよ?」

「そーそー。面倒くさがりの人間なんて、求められてないぜ?」

孝太にまでこんなことを言われ、俺は面倒くさくなってきたこの話を終わらせるためにヒラヒラと大きく手を振った。

「わかってはいるって。とりあえず、政経か商学あたりが妥当かなって考えてはいるよ」

俺はさっさと成績表をしまい、鞆をつかんで大きく伸びをした。

「そんなのはいいから、さっさと帰ろうぜ。日が暮れちまうぜ。せっかく夏休みが始まるって言うのにさ」

学生にとってもっとも至福の時を過ごせる夏休み。だが、受験・進路が関わってくる俺たちにとって、そうはいかないのだ。

「な、竜」

帰り道、さっきの話を引きずる空気を出していた孝太が、出し抜

けにこんなことを言い出してきた。

「お前さ、将来先生になれば？」

思わず体をこわばらせる俺。蝉が鳴く音がやけに大きく響き渡る。そして。

「絶対にいやだ」

深く考えることもなくきっぱりと言ってやった。餓鬼のお守りなんてまっぴらごめん。金八先生みたいになれってか？それに、大学で教育課程とつたらメチャクチャ忙しくなるじゃねえか。忙しいのは嫌なんだよ。

それをこいつは良く知っているくせに俺に勧めてくる。

「そうかあ？俺は適任だとおもうなあ。お前人を引っ張っていける素質あるし」

「何度言わせるんだよ。面倒くさい奴に教師なんか務まるのか？」

孝太が俺に教職を進めるのはこれがはじめてではなかった。いつからかは忘れたが、とにかくここ最近ずっと言い続けている。

「そもそも俺が教師に適任って根拠は何だよ？勘か？」

皮肉のつもりで言ったのだが、孝太は素直にうなずいた。

「そ。お前その勘で教師いけるよ」

「…阿呆か。勘で教師やれたら世の中の教師はノイローゼになんかならねえよ」

（それはそうね…でも）

2人の会話を聞きながら綾瀬は心の中でつぶやいた。

（竜なら、できるかも。竜の勘って、半端ないし）

俺が普通じゃないといわれる理由。それはこの勘だった。何でか知らないが、俺は昔からなんとなく考えたことが百発百中あたるのだ。自分で言うのもなんだが、これまで生きてこられたのは、この勘のおかげといっても過言ではない。

でも、俺はこれを特別ななんておもった覚えは無いぜ？

「それじゃあ、またな」

「専門学校っていつでも、勉強さぼるなよ？孝太」

「わかってるって！！じゃあな！！」

孝太は左の道に、俺と綾瀬はそのまま真っ直ぐ道を進んだ。半ばはしゃぎながら家に帰っていくあいつの姿を思い浮かべながら俺はぼやいた。

「あいつもすごいなあ。何だかんだいって進路サクサク決めてるし」

「…そうね」

同感、というように綾瀬もうなずいた（たぶん現在の俺を念頭に

入れていることだろう)

実は俺たちはお互いマンション一人暮らしのお隣さんなのだ。だから帰り道をよく一緒になることが多い。

「竜は、夏休み中はずっと勉強？」

「ああ、バイト入れながら。でも今年はどっかいくかも。叔父貴のことか」

「そう」

「綾瀬は？」

すると彼女は首を振った。

「どこにも。母さんが夏ぐらい自分のところに帰って来いってうるさいけど、行きたくないしね」

マンション前までくると、それじゃあとって綾瀬は俺にいった。

「あたし、図書館いつてくる」

「今から？ 期末終わったばかりだろ？」

すると綾瀬は俺の目の前に仁王立ちになって言い放った。

「受験は油断が命取りになるの。じゃあね」

そういつて綾瀬は俺に背中を向けると、図書館へと向かっていった。そんな彼女の後姿を眺めながら、俺は一人ぼそとつぶやいた。

「あいつ、少しは気を抜けないのか？…まあ、しかたがないか」

俺はクルリと背中を向け、マンションへと入っていった。

このときから、すでに奇妙な齒車は回り始めていたのかもしれない。

俺の生活どころか、人生をもかえてしまつ、奇妙な齒車が。

終業式から3日後。

「秀治さん。おい」

俺は親父の弟に当たる叔父の家を訪ねていた。叔父は俺の家から2時間くらい離れたただっ広い田舎に、古い長屋のような家を買って暮らしている。

「……あゝあ」

俺は家に着くなり、大きく肩を落としたそして。玄関に転がっている空のダンボールの山を踏み潰し、リビングへの道を開拓している。

「この間片付けにきたばかりだろ？何で2ヶ月ちよつとでこうなるんだよ」

俺はとりあえずリビングに自分の荷物を置くと、そのまま家の奥にある洋風造りの部屋に向かった。他は和室なのだが、ここだけはマンションの一部屋のようなつくりにしてあるのだ。

なぜならば、ここが特別な場所だからだ。

「……やっぱり」

部屋の扉を開けた俺は、書類の山に埋もれた中に、植物のようによきつと生えている腕をひっぱりあげた。

「…今度は何日こうしてた？」
「……」

返答は無い。腕の主は書類の山から引つ張り上げられても、ピクリとも動かなかった。俺はため息をついて、人間の残骸のようになった男を台所に担いでいった。

この男が俺の叔父：高遠^{たかとお} 秀治。へんてこな研究者である。

「いや、ありがとう」

「…俺が来るまで待っていたのか？」

秀治はニコニコと笑いながらうなずいた。

「あそこから抜け出すのが面倒で」

「………いつそ飢え死にさせればよかった」

俺は暢気な顔に呆れ肩を落とすと、秀治がたいらげた飯の皿を片

付け始めた。

「だいたい、重要な研究所だからああいう風にわざわざ改良したんだろ？大事な場所なら、もっと綺麗にしておけよ。何でああなんだ？どの書類がどこにあるかわからなくなるだろうが」

「ん」

まともな返答を期待した俺が馬鹿だった。俺は本気で悩んでいる叔父を放っておいて、皿洗いを始めた。

（まったく。なんで馬鹿じゃないのに馬鹿なんだ？）

なぜ俺がこんなことを言うかというと、本当に、叔父に対してはこの奇妙な言い回ししか表現することばが見当たらないのだ。叔父は10年前まで、世界的な科学者になると評判なくらい、みんなから大いに支持されていた。なんでも、時期ノーベル賞は楽に取れるぐらいだったらしい。

それが何をどう間違えたのか。はたまた何が起こったのか。原因はいまだにわからない。叔父は10年前に突然タガはずれ、俺の親父のように、変人の領域に足を踏みいれてしまったのだ。

そしてこの10年間、常人（もちろん俺も含むぞ）には理解できないような代物を作って日々暮らしている。まあ、収入のため、時々政府の仕事も請け負っているから、一応ある程度の理性は頭の片隅にあるのだろう。

……何を作っているかって？だからいったらだろうが。常人には理解できねえって。

「そつえば竜」

皿洗いをし終えた俺に、叔父ののんびりとした声が響いた。

「今回は、何日ここにいるんだい？」

「……ここが片付くまでだから、1週間つてところだな」

「ええ」

秀治はまるでだだをこねる子どものような声を上げた。

「もっと居ようよ」

「……受験生なめてんのか？」

俺の言葉に、叔父はチツチと指を振った。

「竜なら問題ないよ。兄さんの子どもで僕の甥なんだから」

こんな変人にそんなこといわれたら、逆に不安要素が増すだけだ。

（だからしかたがなく勉強しているんだよ）

とにかく、とリュウは叔父に指を突きつけた。

「しばらくはここにいる。だから、片付けとかは俺に任せて、さっさと請け負った仕事すませろ」

そう言い放つと俺は、早速玄関の掃除（開拓作業）をはじめために部屋を出た。

「…まあ、いつか」

秀治は一人、散らかったりリビングでなにやらたくらみごとを頭の中で繰り返し広げていた。

「今回の実験、巻き込んだら巻き込んだで、それを期に全部説明すれば」

「まったく、ダンボールぐらいつぶしておけよな」

俺はまず、山積みになっている空のダンボールから片付け始めた。ダンボールをつぶし、平らにして紐でしばっていくという行動をただただひたすらこなしていく。

その作業を約1時間続けると、ようやく家の床が現れてきた。

「…はあ」

たかがダンボール。されどダンボール。疲れることに変わりはない。俺は最後の仕上げとして、ダンボールの束を入り口の横に積み上げた。

「あとは、掃除機をかければいいか」
「竜」

掃除機を出そうとしたその時、急に叔父の声が響いてきた。

「ちよつといいゝ?」

俺は首をかしげながら叔父の部屋へ向かった。

「何だよ?」

「あ、やっちゃった」

「は?」

次の瞬間、目も眩むような閃光が部屋の中を満たし、あつというまに俺と叔父貴を包み込んだ。

そして

その後部屋に残されたのは、部屋に舞う書類と、奇妙な機械だけだった――。

第二章＊ドラゴン王国：ガルガドス＊

「……」

「あゝ成功、成功」

叔父はのほほんと青空を眺めながらつぶやいた。そしてその青空を、得体の知れない生き物が滑空している。……俺の視力が正常でなら、あれは間違いなく。

ドラゴンだ。

「……おい」
「なに？」

暢気な叔父の顔に、今ほど殺意を抱いた瞬間はない。

「一体…何をした？」
「え」と、ねえ」

叔父は俺の気迫に、困ったように笑って見せた。

「簡単に言うと…異世界に飛んじやった」
「へえ…飛んじやったのかあ」

俺はあははは、と笑いながら叔父の首を締め上げた。

「りゅ、竜、ちょっと…僕死んじやう…」
「1回そうして、頭の中浄化しろ——っ!!」

俺の叫び声は、突如放り出された草原地帯にむなしく響き渡った。

「…何、今の？」

草原から風に乗って響いてきた叫び声に、少女は首を傾げてみせた。

「誰かが、叫んでいたような…」

「アデル！早くおいでよ！！分け前なくなっちゃうよ？」

「え！？ちょ、ちよつと待ってよーっ！」

少女は今聞いた叫び声のことなどすっかり忘れ、大慌てで広場の中央へと駆け出していった。

ドラゴン王国ガルガドス。それがこの国の名前らしい。

その名の通り、ドラゴンがうじゃうじゃ生息しており、おまけに人間を襲うときている。

「つまりそれは、人間を餌にしているってことか？」

「主食ってわけじゃあないけどね。たまに食べるよ。だってその辺にいる家畜だけじゃ足りないだろうし」

「…たしかに」

「おまけに、縄張り争いもあるからね」

国の領土自体かなり広く、山、海、谷、川といった自然にあふれており、ドラゴンはそういった場所に住んでいるそうだ（つまり、全区域にいるってことだな）

そして、ドラゴンが人間を襲ったときに備え、ドラゴン・ハンターというドラゴン退治専門職の人間が、日々ドラゴンとの戦いに明け暮れているというのだ。

「あとはねえ…」

「まだあるのかよ…」

俺は奇想天外なことを詰め込みすぎた頭を抱えて、草原にしゃがみこんだ。もともと叔父はわけのわからない人間で、突拍子も無いことをやるのはよくあることだった。

だが、こんなにも常識を超えた出来事に巻き込まれたのは初めてだ。にもかかわらず、ぐしゃぐしゃと悩む俺とは正反対に、当の本人はのんびりと構えている。

「まあ、とりあえず…」

「とりあえず、で解決できる問題か？」

恨めしそうににらむ俺に向かって、叔父はゆっくりとうなずいた。

「うん、できるよ。知り合いのところに行こう」

そういわれて俺は、叔父の指差した方角を見た。指先にあったのは、比較的大きな町…のようだ。

「あんなところに町が…」

「竜、早く早く」

俺たち2人はもくもくと草原を歩き、遠くに見える町へと歩いた。急いで町にたどり着かないと、いつ何時あの空を悠々と飛んでいたドラゴンの標的になるかわかったものではない（ついさつきドラゴンが人を襲うという話を聞いたばかりならばなおさらだ）

ただしその間俺は、叔父に言いたい言葉を必死になって腹の中で抑え続けていたのだが。

（何で異世界に飛ばすようなことに？そもそも、何で異世界に知り合いが？てか、俺の夏休みは？どうなる？帰れるのか？一体……）

「何いろいろと考えてるの？」

「誰のせいだ！（怒）」

俺は噛み付かんばかりの勢いで叔父に食って掛かった。もしドラゴンのような牙があったら、本当に噛み付いてやるところだ……特に頭を狙って。

「まったく…何の前振りも無しに、こんな場所に連れてきやがって」「ええ〜前振りしたじゃん。ちゃんと呼んだでしょ？」

「どこがだ！『竜〜ちよつといい〜？』の一言で俺はあんたの思考回路全てを悟れと！？」

「無理？」

「……………行こう」

これ以上言い争っていると、俺の身がもたなくなる。

ようやく村に到着したときは、すでに夕日が地平線に傾き始めたときだった。

「もうこんな時間なのかよ…」

俺は暗くなった町の様子を見てつぶやく。すでに人の姿はなく、家のところどころで明かりがポツポツと灯り始めていた。そしてその情景を見た俺は、ようやく異世界に来てしまったことを改めて自覚したのだった。

なぜかという、村の中が明らかに俺の住んでいる世界とことなる建物だからだ。

木や石、漆喰を基本とした家の造り。奥を見ると、大きな丸い広場があり、そこには手動式の井戸が慎座している。

それに先ほど説明した家の中の明かりは、電気の明かりというより、蝋燭の明かりに近い色だった。

つまりこの世界は、自分がいた場所よりもレトロだということだ。生活水準でここが異世界と決め付けてしまうのは失礼だが、ここは明らかに自分達が知っている世界ではなかった。

「竜、こっち、こっち。」

ぼんやりと辺りを見回して俺に、叔父の声が届く。そして振り返った俺は、その事をえらく後悔する羽目になった。

俺が背後に見たものは、白衣を着たままの叔父と、鎧を身に着けた屈強な男達。この状況はあきらかに…。

（不審者と間違われている）

「ええと、確か…」

男達のするどい視線が注がれる緊迫な雰囲気の中、叔父は相変わらずのんびりとした調子のまま、白衣に着いているポケットの中をのそのそと探っている。

（何やってんだよ…）

自分が怪しまれているという自覚が毛頭ないのか。はたまたそれ以前に、あの男達の存在に気づいていないのか。

（可能性としては、両方、だな）

「おい、貴様もこいつの知り合いか？」

不意に声をかけられ、しまったと思った時にはすでに手遅れ。今度は叔父に視線を注いでいた俺に兵士達の視線が向けられてしまっていた。

（まずい…）

一応俺も馬鹿ではない。話し合いあえばわかるなんで状況でないことぐらい把握している。そもそも、別の世界からやってきたなんて説明をしたら、たちどころにひっ捕らえられてしまうだろう。

（物語によくある馬鹿馬鹿しいパターンだが、現在の状況を見るとその流れになりそうなことは一目瞭然だな）

俺はどうにかして言い逃れをしようと考えたが、頭に浮かんでくるのは余計な考えばかりだ。やっとのことで、なんとか話を切り出そうとしたその時。

「あ、あつた」

その場の空気に不似合いな叔父の声が響いた。

「いやゝなくしたかと思って焦ったよ。よかった、よかった」

そういつてポケットから取り出したのは、懐中時計のような丸い形をしたメダルだった。俺にとって話を打ち切ったそれは迷惑極まりないものだったが、なんとそれは俺たちにとって救いの手だったのだ。

なぜならばそれを見せたとたんに、警戒していた兵士達は慌てて叔父に敬礼をしてみせたのだ。

「無礼な働き、申し訳ありません!」

しかも、敬語で謝罪を述べている。だがもっと驚いたのは叔父の態度だった。こういうことは初めてでもないかというように、こいつはニコニコと笑っていたのだ。

「いいですよ別に。僕もしばらくここに帰ってこなかったから」

——しばらく帰ってこなかった、だと？

硬直する俺にかまわず、叔父は俺の腕を取って兵士の前に立つ。

「しばらくお世話になりますから。あと、この子僕の親戚。怪しい人じゃないから安心して」

「はい、了解しました」

背筋を伸ばした姿は、まるで森に聳え立つ大木そのもの。俺は叔父に半ば引きずられるようにしてその大木兵士の間を抜けていったのだった。

「…おい」

「なーにー？」

俺は叔父に連れられ、村にあった古い（ぼろい）大きな一軒屋の中で憤然としていた。大きいといっても、中身はほとんど空に近い。その家は、風呂場と台所とベット以外何もない。しかも風呂場だけ隔離されているような形になっているだけで、あとの家具はすべて得体の知れないガラクタとテンでバラバラにポンと置かれている。

「一体どうなって…そもそもここは何なんだよ」

「僕の研究所。昔ここに一時期棲んでいたから」

「……」

疑問が多すぎて、どこから何を質問していいかまったくわからない。再び頭を抱えてうめく俺に、家の中の整理をしていた叔父はク

ルツと俺に顔を向けた。

「まあ、いろいろ混乱しているのも無理だろうね」

……ようやく気がついたのか、この人は。

「でも、ここにはいつか連れて来ようと思っていたんだ。兄さんの約束もあるし」

「…親父？」

突然父親が話に出てきたことに、俺は思わず悩むことをやめて叔父の顔をまじまじと見つめた。

「まさか、親父もここに来たことがあるのか？」

「うん。それどころか、俺はここに来るの初めてじゃあないよ？ 赤ちゃんの頃、兄さんが奥さんと君をここに連れてきたときがあったらしいから」

「らしいって…」

赤ん坊の頃の記憶などあるわけがない。確証の無い話に顔をしかめていると、叔父は少し寂しそうに笑って見せた。

「その頃僕は、研究が忙しくて兄さんと連絡を取ることが無いに等しかったんだ。それに、僕の奥さんとの間も悪くなる一方だったし」

たしか叔父は、たがが外れて変人になる直前まで結婚していたはずだ。その後叔父の奥さんは、変人になった叔父に愛想をつかして出て行ってしまったらしい。

「まあ、とにかく。しばらくここで暮らすから、いろいろ準備しな

いとね」

「……はあ!？」

俺は思わずすっとなきような声を上げてしまった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ! ! すぐに帰るんじゃないのか! ?」

「いいじゃん、せっかく来たんだし。それに、今すぐ帰るのは無理だし」

「何で! !」

実はね、と叔父は家の中にある奇妙な塊に歩み寄った。覆いを取り外されたそれは奇妙な機械で、さっきまでいた叔父の部屋にあった妙な機械と形がよく似ている。

「これが向こうへ帰るための機械なんだけど、何年も使っていないから壊れているらしくてね。壊れていなかったら、さっきあんなだっ広い草原に放り出されることにならなかったんだけど」

つまり、さっきの移動は成功でもあり失敗でもあるわけか……って、そんなことはどうでもいい! !

「…簡単に言うと、用は機械が壊れていて帰れないからしばらくここにいます?」

「そゆこと」

「……」

高遠竜 17歳。 平穏な人生をこの短い間で覆されました。

第三章＊ドラゴン・ハンター＊

ガルガドス王国首都：ガメルス。国を治める主要人物達が住むこの国で、とある人物が最後の書類に目を通していた。

金色の髪に端整な主顔をしている男性はようやく最後の書類に目を通し終えると、疲れた体をほぐすように大きくのびをする。

そんな彼の元に、一通の手紙。トラブルが飛び込んできたのは、彼がお茶の支度を頼み、それを待っている時だった。

「ウォール伯爵。伯爵宛にお手紙が…」

長年仕えている執事の言葉に、彼は軽く眉をしかめた。

「手紙だと？後にしてくれ。今ようやく仕事を終えたばかりだ」

そういうと、伯爵は召使いが持ってきたお茶を軽くすすった。だがいつまでたっても去ろうとしない執事に、再び疲れた目を向ける。

「なんだ？」

「……それが『天空の紋章』の印が入ったものでして」
「紋章だと？」

伯爵は思わず目を大きく見開いた。

『天空の紋章』……ドラゴンに関する事で多大なる功績を残した者に与えられる、上級貴族同等の権力を示す称号。これを持つ物から連絡が来るのは久しぶりだ。

「だが、なぜ私に？最近称号を手にしたものは、ついこの間形式的な挨拶をしにきたばかりだが」

最近といっても、5年前である。それだけ称号を得るものはごくまれであり、そういった功績を残すことはなかなか難しいということだ。

一体誰が何の用件で、と半ば面倒くさそうに手紙を開いた伯爵は最初の一行を読んだ瞬間、飲んでいたお茶のカップを取り落としそうになった。

「な……に……」

そして手紙の中身を読み進むにつれて、さらに顔を青くしていく。

「あの……大ばか者が」

最後まで中身を読み終えた伯爵は、仕事の疲れも忘れ去り、大急ぎで出かける仕度を始めた。

それから3日後。町にて…。

「やっぱり買い過ぎたか？でも仕方がないよな。あの家何もないからなあ……」

俺は買い込んだ荷物を危なっかしげに抱え込み、通りをよろよろと歩いていた。その間、通りを行き来している町の人たちはくすく

すと笑いながら俺を見つめている。

時折、手伝おうかと声を掛けてくれる親切な人もいたがそれに答えるほど余裕が無く（それに男が荷運びを手伝ってもらうというところが多少プライドにも差し障ったので）俺はなんとか笑顔を作って返事の代わりを返していた。

「そもそもバランスが悪いんだよ。今度から手提げでも作って持っていくようにしねえと……っ!!」

ぶつぶつと独り言を言いながら広場に入った瞬間、俺は全速力で横切ってきた少女に危うくぶつかりそうになってしまった。その拍子で、アンバランスに抱えられた荷物が腕の中でぐらつく。

「うわつととと!!」

「きゃ、ごめんなさい!!」

崩れた荷物を抱えなおす俺をギリギリのところかわし、彼女は衝突をまぬがれた。

だがそれでも走るのをやめようとはしない。よほど急ぎの用事があるようだ。少女は謝罪の言葉もそこそこに、風のごとく走り去っていった。

「……なんだ、あれ？」

俺は荷物を抱えたまましばらくの間そこに立ちすくんでいたが、やがて体を家の方角に向け、家へと続く道を再び歩き出した。

「ねえねえ、聞いた!？」

走り続けていた少女はようやく、目的地のとある宿屋の前にたどり着き、勢いよく扉を開け放った。

「この町に、天空の紋章」をもった人が来たんだって!!」

「ああ、知ってるぞ」

少女の興奮した知らせに、テーブルに腰を掛けていた青年が事も無げに答えた。彼は黒い細長い筒のようなものを磨く手を止めずに話を続ける。

「町の警備兵士がうわさしていたのを聞いた。結構大きい騒ぎになっているらしいぜ?」

「正確に言つと、ここに帰ってきたつて言うのが正しいらしいです」

青年の言葉に付け加えるかのように、宿の階段から降りてきた少年が答える。

「昔この町に一時期住んでいたって聞きました。しかもあの古い物置小屋みたいな場所に。なんでもその人、僕らの武器の初期開発メンバーにいたらしいんです」

その言葉に、青年は目を丸くして少年を見つめる。

「それ、本当か?」

「ええ。それで提案なんですけど……」

彼は少し言葉をどもらせながら言葉をつむぐ。

「その人に会いに行きませんか？もしかしたら、何かいろいろと聞かせてくれるかも知れませんか……」

「どうだかな……」

多少興味を示したかと思いきや、青年は難しそうに顔をしかめてみせた。黒い筒を背中の革筒に入れ、ゆっくりと立ち上がる。

「ここに来ること自体、久しぶりなんだろう？それまでにドラゴン撃退のための武器を作っていたかどうかなんてわからない」

青年は、がっかりした様子を見せる少年に向かって首をすくめた。

「それまで何をしていたかわからない奴よりも、ここでずっと働いている技師に聞いた方が、俺はずっといいと思うけどな……正直、俺はよそ者をあまり歓迎しない……」

「いいじゃん。会ってみようよ」

突如降ってきた言葉に、ぱつと顔を輝かせる少年。にこにこ笑顔を広げる少女。少し洪い顔をする青年。皆の顔を見て、声の主である彼女はいたずらっ子のような笑顔を青年に向けた。

「面白いことがあるかもよ？それに、天空の紋章、を持っているのが一体どんな奴か、あんたも気になるでしょ？」

「ただいま…つていつでも誰もいねえよな」

俺は大荷物を抱えながら危なっかしげに扉を開けた。

「まったく…食料品の買い込みぐらい手伝えよな…」

昨日急遽作った有り合わせの机に食料を広げ、俺は種類わけを始める。

「ええと、これは地下の貯蔵庫。これは…日持ちするからここでも大丈夫だな」

この町に着てから3日目。俺はとにかく生活に慣れるため、必死になって必要なものをかき集めていた。叔父のあの話を聞いてから…。

「そうそう、竜。大事なことを言い忘れてた」

「……まだろくに事情を聞いてもないのに？」

俺の皮肉たつぷりの言葉を気にも留めず、叔父はじつと俺の顔を見つめてこう言ってきた。

『この世界の人に、別の世界からきましたってことは秘密だよ？』

『…そりゃあ、な』

深刻な顔をして何を言うかと思いきや、そんなことか。心配しな

くても、俺はそんなことを言いふらすほど馬鹿じゃあない。だいたいそんな非現実的なこと、周りが簡単に受け入れるわけないだろ（俺にとつてはここも十分非現実的だけど）

『まあ、周りに受け入れられないってこともあるんだけど』

俺の考えを見透かしたかのように、叔父は話を続ける。

『別世界の情報が行き来するのは、あまりいいことじゃないんだよ。技術発展にも影響が出るからね』

『…それはつまり？』

『つまり、僕らの文化や技術を伝えるってことは、何も知らない子どもに銃を持たせるような危険性もあるって事さ。僕らの世界のほうが、科学技術は進んでいるからね』

『……じゃあこの転送装置は何なんだよ』

『あはははは〜』

『おいっ！！！！』

「つたく、妙なところで理屈が通ってないというかなんというか…」

…」

俺は食料を壁に打ち付けてある戸棚にしまいながらぶつぶつと文句を言った。

文句が多いと思うかもしれないが、いいたくもなる。なにせこういう環境に住む羽目になった張本人は、あれからほとんど家におらず、最近は何夜になつてからでないとここには帰ってこないのだ。

「これじゃあいつになったら家に帰ることができるか、わかんねえよな……」

俺は最後の荷物をしまい終えると、大きくため息をついて肩を落とした。

「とりあえず、まずは周りに俺たちのことを悟られないように気を付けないと……」

「こんにちはーっ!!」

「!?!」

突然響いてきた騒がしい声と扉が開く音に、俺は思わず飛び上がった。そして慌てて入り口を振り返ると、4つの姿が日の光に反射しているのが視界に飛び込んできた。

ちょうどその頃、町のとある屋敷では……。

「や、久しぶり。アルバース」

「……わざわざ呼び寄せておいて出会いがしらにその台詞が」

こんな態度を見せられては、怒りを通り越してあきれしか出てこない。

にこにこ笑顔を浮かべている秀治に対し、ドラゴン対策部門に属する貴族の1人、アルバース・ウォールはため息をついた。

「そもそもあの手紙はなんだ？冒頭に『お久しぶり』という言葉添えられた文章を私は始めてみたぞ？」

「あ、そう？よかったね」

「……もういい」

アルバースは後ろにあったソファにどっかりと座り込んだ。そしてしばらくの間天井を見つめながら物思いにふける。

「…だが、本当に久しぶりだな」

アルバースはそのままの状態でポツリとつぶやいた。

「ちょうどあの日が最後だったからな。お前に会ったのは」

「…まあね」

秀治は静かに笑って見せた。その表情には、どこか寂しそうな雰囲気気がただよっている。

「あの日以来、機械には触れなかったから」

「…それで」

アルバースは体を起こし、じつと秀治を見つめた。

「今回は一体何のようだ？わざわざ私を呼んだくらいなのだから、何も話さないとはいかないぞ？」

「おじゃましーす」

「なんだよ、随分と殺風景だな」

「あ、あの。勝手に入るのはまずいと思いますよ？」

「でももう入っちゃったし、しょうがないんじゃない？」

突然現れた連中とその騒がしさに対してあっけに取られていると、向こうが先に俺の存在に気がついてきた。

「あ！すみません！」

1人の少女が俺に駆け寄り、きらきらと目を輝かせて俺を見つめてきた。どこかで彼女をみたような気がするが、どうも思い出せない。

「あなたが‘天空の紋章’を持っている人ですか？」

「え？あ、いやその……」

その天空のなんたらとかいうものは俺にはまったくわからないものだが、彼女が叔父のことをさしているのはすぐに理解できた。

「たぶん、それは俺の叔父だと思う……」

「だろうな。そんなに若くて紋章を持っているわけがねえし」

口を挟んできたのは、俺より身長が少し高い男だ。外見からして青年っていったほうがいいんだろうけど、言葉使いからしてそんな言葉が似合うほどさわやかな奴じゃない。

「あの、あなたの叔父様は今ここにいらっしゃいますか？」

年の割には随分と丁寧な口をきく少年が、俺の横から尋ねてきた。

彼は一見冷静に見えるものの、どうやら目の前にいる少女と同じくして興奮しているらしく、顔が真っ赤だ。

「いや、叔父貴は最近出かけることが多くて。たぶん、夕方頃か、遅ければ戻ってくるのは夜だな」

「そうですか……」

俺の言葉に対して残念そうに肩を落とす少年の体を、もう1人がぼんぽんとたたいて慰める。

「そんなにがつかりするんじゃないの。会いたいなら、この人に伝言かなにか頼めばいいでしょう？」

「あ、はい！お願いできますか？」

面倒だが、期待にあふれた少年の願いを断るほど俺は冷たくなれない。俺はゆっくりとうなずいてポケットから買い物用に使った紙切れとペンを取り出した。

「わかった。名前を覚えてくれないか？そうすれば俺から、叔父貴に会いたい奴が尋ねてきたって伝えとくからさ」

「ありがとうございます！僕の名前は、ルカ・ロゼルです」

「あたしはガート・リセナ」

少年：ルカの脇にいた彼女はにっこりとわらって自分の名前を俺に告げた。

「あ、あたしも、あたしも！アデル・シーファン！」

俺にきらきらとしたまなざしを向けていた少女は飛び跳ねながら名前を言った。そして彼女の場所から少し離れたところに立つあの

男に声を掛ける。

「ほら、ザックー!!自己紹介!!」

「……ザック・ヴァルト」

そいつは面倒くさそうに名前をつげた。相手の態度はともかく、俺は一応全員の名前を書き連ねておくと、もう一度何か書き加えることはないか彼らに尋ねた。

すると、ルカが俺に向かってこういったのだ。

「そつだ。一応僕らの職業も伝えておいてくれませんか？」
「職業？」

こんな年の奴らも働いているのか、といぶかしむと、俺の反応に對してザックが首をすくめながら言った。

「おいおい、まさか俺たちの姿見てわかんないともいうのか？」
「？」

俺が首を傾けると、ガートが苦笑しながら付け加えた。

「まあ、わかんないかもね。今仕事道具持ってるのザックだけだし。今日はたまたま仕事がおつだったしね」

「それもそうですね。今日は防具もつけていませんし」

「……………まさか。」

俺は彼らの職業に対して、とある推測が浮かび上がった。昨日から生活用品を買い足すために街中を出歩いていると、防具や武器を

見につけた連中が、何やら聞きなれない会話をしているのが飛び込んできたからだ。

『この間の獲物はてごわかったなあ。あやうく腕を焼ききられそうになったぜ』

『俺なんか、あのごつい尾でつぶされそうになったぞ?』

会話の対象が人間でないことは一目瞭然。しかもその生き物は虎やクマといったメジャーな猛獣でないことも確かだ。となると、この世界において残る生き物はただ1種類……。

そして俺の推測を、アデルと名乗った少女が次の一言で完璧に裏付けてくれることとなった。

「あたし達、ドラゴン・ハンターなの!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530c/>

Dragon Hunter ~ 飛翔編 ~

2010年10月11日00時58分発行